

[03_02]情報処理教育広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6767914>

出版情報：情報処理教育広報. 3 (2), 1980-11. Educational Center For Information Processing,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



学生レポートから —ある学生のレポート作成苦心談—

今回はセンターを利用した講義の受講学生が提出したレポートの中から、担当教官を「うならせた」一つの作品を紹介します。先生の一存で掲載させてもらったので、学生の名前は公表しないことにします。

＜序 章＞

昭和五十五年二月二十八日、試験も終わったというのに早朝より出校。そのまま朝食もとらず中央図書館へ行く。大体が、今回の宿題は、なまじっかなことでは解けないこと位最初から解っていた。図書館で「PASCAL . 例題と解法」のような参考書を見つけて、ご高名な先生方のお知恵を拝借しようと考えたのである。

暫らく、3階の参考図書庫回りをウロウロする。すぐに見つかると思っていた。何しろ、ACOS-6 PASCAL は、教育センターのものであるからして、その利用法に関する文献には、事欠かないと思ったからである。教養部で「情報科学」を少しかじった時、教養部図書館にあるFORTRANの参考書にかなりお世話になったものだ。それが甘かった。

思い当って2階のレファレンスルームに行く。こういう事は、専門家にきくのが一番。「済みませんが、PASCAL の利用法に関する本はどの辺にあるのでしょうか。」係の女性は「パスカルのリヨウ法ですね。暫らくお待ちください。」と言って、登録カードを調べに行った。たいがい「暫らく」という時間は長いものだが、図書館の暫らくはかなり長い。漸くさっきの係員が戻って来て、「生憎、パスカルの本はこれだけしかありませんが。」と、幾枚かのカードを差し出した。「パンセ」「円錐曲線論」??? 「ユーモアにはいつもペーソスがつきまとう。」と、高尚なことを考えないと吹き出してしまいそうであった。それを鳩胸でグッと押さえ、「あう、実は僕の言うパスカルは、計算機のプログラム言語の名前でして……。」誰だ、プログラム言語にあんな名前付けたのは。「その言語の取り扱い方を書いた本がないかと思って来んです。」「あゝ、そうですか。」そりゃ驚くだろうさ。こっちも驚いたんだから。これで、情報科学に対する勉強が、ここでは余り熱心に行われていないことがわかった。

さて、とにかくACOS-6 PASCAL を見つけねばならぬ。そこで、思い当って、講義で配られたコピーを取り出す。あったあった。「それじゃあ、済みませんが、このK. Jensen とN. Wirth のPASCAL User Manual がありますか。」「あゝ、これですか。搜してみます。」やはり、心配だから、ついて行くことにした。二人がかりで真剣に搜す。「あっ、ありました。これでしょう。481-6 のJ89-1 です。」場所さえわかればしめたもの。「ありがとう」と礼もそこそこに書庫へ降りた。

案外、薄っぺらな本だった。しかし、中を一目見て驚いた。全部英語である。喜びは音をたてて、失意となって崩れ落ちた。「だが、常に希望だけは捨ててはならない」と、珍らしく意地になり、辺りを見廻した。そこは数学・計算機関係の書棚であった。大型計算機の使い方とか、ソフトウェアとか言う本が並んでいる。それを一冊一冊広げて見る。ダメであった。どれもこれも、概論は載ってはいるが、肝心の例題が殆んど載っていないかった。そして、わずかにあるものも、役に立つものではなかった。

生協で昼食をとりながら考えた。どう考えてもおかしい。そんな筈は無いのである。大体があんな高度な問題を幾つもの先生一人で考えられる訳がない。特にNo.11の問題は明らかにコピーである。必ずオリジナルがある筈である。どこにあるか、それが問題だ。

情報科学に関する書籍はここ以外、どこにありますか。」再び例のレファレンスルームである。眼鏡の女性が首をひねる。「そうですね。それなら基礎情報棟、あの理学部3号館の6階に図書館の分室がありますから、そこならあるかも知れません。」と言ってくれた。早速行ってみる。最後の希望である。何か悲愴なものまで感じられた。

場所はすぐにわかった。しかし、何と鍵が掛っていた。用心の良いこと。全くため息が出る。意を決して隣室の事務室をノックする。「済みませんが、図書室の本を閲覧したいんですが」「あゝ、どうぞどうぞ。」意外に快く鍵を開けて

くれた。やったやった。夢中でPASCALを捜す。

しかし、惨め。そこにあるのはALGOLやCOBOLやPL/Iだけで、肝心のPASCALはどこにも無かった。一体どうなっとなのや／ 何でPASCALが無いんやろう／ 失意の内に門を出た。

もう日が暮れかけていた。眼がズキズキ痛んだ。頭がボーとする。足元がフラフラする。それでいてイライラだけが高じていた。もう帰ろうと思った。未だ工事中の建物もあるのか、と思ってそのビルを見上げた時、あるひとつの考えが浮んだ。そうだ、ここにもあるかも知れない。そう思うとすぐさま、その大型計算機センターに飛び込んだ。

やはり、やはり、そこにはあった。4階図書室。未だ工事中の階段を駆け上ってドアを開く。係の女性にPASCALの例題集を頼んだ。確かにそれらしいカードがあった。捜してみる。????? 無い／ ひょっとして先を越されたのかな。「済みません。この本、誰か借り出していないせんか。」「ちょっと待ってください。えーと……。あゝ確かに貸し出し中ですね。」「そうですか……。」「ガックリであった。きつと目敏い奴が持って行ったに違い無かった。全てが水泡に帰したのである。「あら、この本。半年前から貸し出したままですねえ。」その女性はウフフと笑って、追い打ちを掛けた。もうだめ／

《 本 章 》

筑波山から吹き降す風は未だ冷たい。関東平野を突き抜けて行く。殆んど無人の都市が広がる。筑波学園都市も春休みである。とても日本とは思えない様な、どこか米国のタウンシップにも似た異様な光景であった。広すぎる。

ずば抜けた設備。冷暖房完備。センスのある建物のデザイン。池のある公園。白壁の学生寮。ひとつひとつの建物の間隔が嫌に遠い。民間人が極度に少ない。これが普段は学生だけで埋まるのだろう。国道並みの完全舗装道路が縦横に走っている。一目でわかる人工の防風林。何もかもがそぐわない感じのする、底冷えの街である。世間から隔離された温室、否、青春の牢獄か……。

彼は、同じ高校の親友である。筑波で法律をやっている。うんざりした口調で説明をする。どこか疲れた影のあるのは、五日間徹夜でコンピューターを打っていたからだろうか。土浦市でとったアンケート調査の収録は、かなり手間が入ったらしい。

是非に、と言って、嫌がる彼を電子計算機センターまで案内させる。「一分間が二万円(?)もするんだぜ。」これが!? スチームの効いた巨大な建物の中で、何人かの学生がガチャガチャ、パチパチと、何やらタイプライターの様なものを打っている。しかし、それは明らかにパンチカードにパンチを入れているのであった。「FORTRANだな。」彼は興味無さそうにうなずく。「教養部では一枚一枚、鉛筆でぬりつぶしたものだ。」「へえー。原始的だな。」

「これがコンピューター。」意外に小さな機械であった。しかし、それが何台も備えつけてある。「金が、あり余ってんだな。」「確かなな。ぜいたくだよ。」果して、九大にもこの十分の一の設備さえ、あるのだろうか。しかも、無名の学生が、入れ替り立り替り、このパンチャーを打ち、コンピューターを動かすのである。一分間、二万円の費用は、全て国家負担で。何とまあ／

《 終 章 》

大型計算機センターの図書室の参考書は未だ戻っていなかった。教養部時代に使ったFORTRANの参考書は殆んど役に立たないし、今度の宿題の難かしさは、生半可なプログラムの知識では処理できないものであった。

しかし、あれを実習するとなれば、念願のプログラムを先生は必ずや、板書してくれるのでありましょう。それなれば晴れて、コンピューターに直面することができる訳です。その時に、あの筑波での驚きがもう一度再現されるかどうか、とてもたのしみなのです。特に、最後の暗号解説は是非やってみたいことのひとつです。

この報告書は、およそ先生の示唆とはかけ離れたものとなりました。お詫びして、反省致します。

＝終＝

昭和五十五年四月十三日

《 追 章 》

同年四月十四日。念願は成就された。九大にも素晴らしいコンピューターがあった。教育センターの講義室に入った時、思わず眼を疑った。これなら、筑波大学の友人も泡を吹くだろう。長い間、ここが工事中であった理由が、今漸くにしてわかった。夢がふくらむ。

それから、もうひとつ。素晴らしい参考書が見つかった。サイエンスライブラリーの「PASCAL プログラミング」である。完全ではないが、これ以上のものは望めない。何とか工夫すれば、少しは形になるであろう。提出期限は五月十二日まで延ばされた。もう一度、試みるだけの価値は十分にある筈だ。